

(様式1-2)

I 学校の概要

主体的・対話的で深い学びの実装推進モデル校事業 多度津町立多度津中学校

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
5学級 143名	4学級 135名	6学級 176名	3学級 16名	18学級 470名

○教員数 45名

◆学校の特色

本校の学校教育目標は「互いに認め合い、自らの可能性を切り拓くためにチャレンジする生徒の育成」である。すべての生徒にとって学校が「自分らしくいられる安心できる場所」であることを基盤に、主体性と当事者性をもった生徒の育成に取り組んできた。授業改善においては、GIGA スクール構想による一人一台タブレット端末の環境を最大限に活用し、ICT を効果的に活用した生徒主体の授業づくりを組織的に推進している。これまでの教師主導の授業を脱却し、学習の主導権を生徒に渡す「生徒に委ねる授業」の実践の中で、生徒一人一人が自らの可能性を最大限に発揮できる授業の在り方を模索し、全教職員で日々試行錯誤を繰り返しながら、その実践の深化を図っている最中である。

II 研究主題等

研究主題 『わかる・できる』を実感し、学びを自ら調整する生徒の育成
～ICT でつながり、「自分がつくる」授業を目指して～

◆研究主題設定の理由

令和7年度に実施した全国学力・学習状況調査において、本校では、既習事項を生活や他場面に活用する力に課題が見られた。また、校内学習アンケートにおいても、「家庭での1日の学習時間が1時間未満」と回答した生徒が40%を超えており、学習に対して否定的な意識を持っている生徒が多いという実態が明らかとなった。そこで、本研究ではこれまで本校が積み上げてきた「生徒に委ねる授業」の実践を研究の土台とし、課題である学力や学びへの肯定感の向上に向けて、生徒が多くの「わかる・できる」の実感を通して、学びそのものを楽しみ、教科を好きになっていくプロセスを重視したい。また、誰一人取り残さない学びを実践していくためにも、ICT を活用し、生徒が自分に合った学習方法を選択し、仲間とつながりながら自らの学びをつくっていくことを目指していく。「授業は先生がつくるもの」から、「授業は自分がつくるもの」へと転換できるよう、教師が生徒の伴走者となって支援していく授業の実現のため、本主題および副主題を設定した。

◆研究内容及び方法

本研究では、ICT を効果的に活用しながら生徒が自ら学びを調整していく姿を目指し、以下の4点を重点項目として授業を実践し・検証する。

1. 「生徒に委ねる」学習指導過程の定着

5つの学習指導過程（みつける・あつめる・ひろげる・まとめる・ふりかえる）を各教科の特性に応じて構造化する。教師による一斉指導の時間や発問をできるだけ精選し、生徒の思考や対話、試行錯誤といった「活動時間」を多くとる。教師は生徒の問いや気づきを支える「伴走者」としての役割に徹し、授業の主導権を生徒へ渡していく。

2. ICT を基盤とした個別最適な学びの実現

タブレット端末を「文房具」として日常的に活用し、生徒個々の習熟度や興味・関心に応じた学習を保障する。ICT を効果的に活用することで、視覚的な理解を助け、自分の考えを多様な方法で表現できる環境を整え、生徒一人一人の「わかる・できる」を確実に実現する。

3. 「振り返り」を起点とした家庭学習との接続

全教科で統一した視点による「振り返り」をスプレッドシートで継続的に実施する。生徒自身が自分の理解度や課題をメタ認知し、その内容に基づいて、紙ドリル・AIドリル・オンライン学習サービス等から自分に最適な学習教材を自律的に選択する。これにより、学校での学びを家庭での自学自習へと円滑につなげ、日常的な学習習慣の確立を図る。

4. 生成AIの利活用による授業改善とフィードバックの高度化

生成AIを授業分析や評価の補助ツールとして導入する。蓄積された振り返りデータの傾向分析や、生徒一人一人の記述に対する個別最適なフィードバックの生成を試行し、教員の校務効率化と指導の質的向上を両立させる。

Ⅲ 成果の評価計画（検証方法）

本研究の成果を多角的に把握するため、以下の3点を検証の柱とする。

1. 学力・学習意識の変容

○全国学力・学習状況調査の分析

昨年度の課題であった「資料の解釈と説明」「知識の活用」に関する設問の正答率を前年度と比較し、授業改善の効果を測定する。また、無解答率の推移に着目し、粘り強く課題に向き合う態度の変容を把握する。

○校内学習アンケートの実施（年3回：4月・7月・11月）

「授業の内容を理解できているか」「ICTを活用して学びを深められたか」「授業と家庭学習をつなげられたか」等の設問について、学期ごとの回答の変化を数値化し、学びへの肯定感と当事者意識の高まりを検証する。

2. 「生徒に委ねる授業」における学びのプロセスの検証

○振り返りシート（スプレッドシート）の蓄積と分析

全教科で統一した視点に基づき蓄積されたスプレッドシートの記述内容を分析する。単なる感想にとどまらず、「何ができるようになったか（成果）」「次はどう学びたいか（見通し）」といった自己調整に関する記述の変容を追う。

3. 授業実践と生徒の姿の観察

○研究授業および日常の授業参観

「生徒に主導権が渡っているか」「ICTを文房具として活用しているか」を教員間で相互に参観し、協議する。生徒の「問いを立てる姿」や「仲間とつながり解決する姿」を具体的な事実として記録し、成果を共有する。

Ⅳ 研究成果の普及方法

- ・公開研究会の設定 年2回（6月・10月） 信州大学教育学部准教授 佐藤 和紀先生の御指導
- ・香川の教育づくりで取組の発表